

道の駅による地域観光振興

きしだ なおみ
岸田奈緒美 同志社女子大学 4年

はじめに

道路整備が進み、人々の移動手段として自家用車を使う機会が増えた。同時に、休憩施設も次々に設置され、長距離移動が以前に比べてとても快適なものとなった。その際に欠かせない施設として、近年注目されているのが「道の駅」であり、国土交通省道路局ホームページのアクセス件数を見ても、渋滞情報に次いで道の駅の利用案内が多く¹⁾なっている。道の駅とは、道路利用者のための「休憩機能」、道路利用者や地域の方々のための「情報発信機能」、町と町とが手を結び活力ある地域づくりを共に行うための「地域の連携機能」の三つの機能を併せ持つ休憩施設²⁾のことである。バブル経済崩壊後、地域への投資縮小、財政の逼迫、地域経済の低迷など著しい影響を受けた地方・地域は、その方策として道の駅を通じての観光交流による地域活性化ヘシフト³⁾していった。道の駅は高速道路上のサービスエリアとは異なり、一般道路に設置され誰でも利用することができ、機械化により快適さを追求した施設に比べて、それぞれの地域の特色を活かした施設やイベントが魅力である。そのため、観光の新しいあり方を見直す上で地域との結びつきは有効な手段とされるようになった。しかし一方で、経営面やサービス内容に関する課題もある。

世界から愛される地域密着型の観光スポットとなるための要素とは何か。道の駅の現状を調査し、地域との結びつきやそこに息づくホスピタリティ、今後のあるべき姿について考えていく。そして単なるドライバーの休憩施設ではなく、他地域や外国の

方に訪れ、楽しんでもらえる場所を目指して、論じていきたい。

1. 道の駅と地域のつながり

道の駅が他の観光施設と大きく異なる点は「地域との連携」を大切にしているということである。近年、道の駅は急速に設置数を増やしているが、ここには設置する市町村の事情もある。道の駅というツールを使えば、これまで目の前を通過する観光客を指をくわえて見ていた地域が、観光客で賑わい特産品の販売にもつながるのであるから、当然の成り行き⁴⁾であると言える。同時にその地域を訪れる観光客にとっても全国津々浦々に道の駅が設置されるようになって、ドライブの楽しみが増えた⁵⁾というメリットがある。その背景には、隣接する米軍基地を展望台から見ることが出来たり、干潟体験が出来たりと、地域と利用客が触れ合える駅が日本全国に点在し、休憩所としてだけではなく、新しくアミューズメント的な要素を持った駅が増えてきているという実態がある。

しかし、課題も多く残されている。過大投資後の維持費に押しつぶされたり、非効率な経営で決算が実質赤字という駅、特産品を並べて売だけの「直売型ドライブイン」に成り下がってしまった駅、営業に熱心になるあまり地域との連携が疎かになって軋轢を抱えている駅もある。さらに、設置する自治体が隣町に負けじと施設を大型化したことで、道の駅間の距離が一定に保ちにくいという問題も起き始めたため、全国の道の駅の所在はかなり偏っている⁶⁾。

道の駅とは、地域における観光のアピー

ルや活性化の場であり、コミュニティ交流の場としての役割を期待されている⁷⁾。交流の内容は、商品に対する情報に関する質問、料理法に関する質問などのほか、特に直接連絡を取ってくる消費者の多いのが、商品への賞賛・感謝を伝える例である⁸⁾。さらにこれからは、都市と地域を結ぶひとつの社会システムとして存在し、道の駅全体のレベルアップをはかる必要も出てくるだろう。しかし、自ら積極的に取り組み、地元の住民や事業者を巻き込む形で交流を始めた駅長もいる一方、これまでの取り組みを変えようとしないうる駅長がいることも事実⁹⁾であり、道の駅全体を変えていくことは大変難しいと思われる。今後は、道の駅間の交流と連携を促進し、相互啓発するとともに、外部専門家や外部機関の指導やノウハウの導入が必要になる¹⁰⁾という考え方が出てきているが、私は、その意見にはあまり賛成できない。新しいものばかりを取り入れ、道の駅が本来の温かみを失ってしまうからである。これ以上状況が悪化するようなことがあれば、どこにでもある大衆的な休憩所と区別がつかなくなってしまう虞がある。もし、外部の指導を受けるとなれば、道の駅は地域に根付いた場所であればならないということに十分注意すべきである。

2. 道の駅による観光と課題

2.1 サービスエリアとの比較

ここでは、道の駅とほぼ同じ特徴を持つサービスエリアとの比較を通して、それぞれの社会の中での位置づけを見ていきたい。高速道路のように出入りの制限されている

